いじめ被害中学生によるいじめへの対処と解決
―いじめ被害者への支援に向けて―

本間　友巳

Coping and Solution of Bullying by Junior High School Students Being Bullied : Support to the Victims

Tomomi HOMMA

Accepted November 2, 2005

抄録：本研究の目的は，いじめ被害経験を持つ中学生が行ったいじめへの対処の特徴を明らかにする中で，彼らへの支援の方法を検討することである。結果は以下の通りである。(1）いじめ被害者の対処に性差が認められた。男子は直接的な対処が多く，女子では間接的な対処が多かった。(2）半数を超えるいじめ解決者が，解決理由を「外部の影響」として記述していた。さらに彼らの半数以上が，転校やクラス替えなどの状況・物理的要因を解決理由として記述していた。(3）これらの結果から，いじめが解決可能であることを伝えていく啓発活動の必要性が議論された。

索引語：いじめ被害者，対処，解決，支援，中学生

Abstract : The purpose of this study is to examine the ways for giving support to Junior high school students being bullied, through clarifying their characteristics of coping with bullying. The main results are as follows. :（1）There was a gender difference in victims' coping. Boys' coping was more direct, while girls' coping was more indirect.（2）More than half of students who had resolved bullying problems described 'outside influences' as a reason of the solution. Moreover, more than half of them gave a description of 'situational factors' like transfering to another school and classes as a reason for the solution.（3）From these results, the necessity for educational activities to inform the victims how bullying can be surely solved was discussed.

Key Words : victims, coping, solution, support, junior high school students

問題と目的

学校で起こるいじめに関する実践的な研究は，いじめが生じない人間関係の醸成や学級風土の構築をめざすようないじめの予防に関する研究と，実際に起きたいじめに対して，いかに有効に対応する

かというういじめの抑制や解決に関する研究が考えられる。前者に関しては，学校全体や学級や個人を対象としたいじめ予防プログラムや心理教育プログラムの実践と評価に関する研究が多く行われている（尾木 ,1997；Suckling & Temple 2002；Thompson, Arora, & Sharp 2002）。

他方，実際に起きたいじめへの対応に関する後者のタイプの研究は，いじめの当事者やその保護者，当事者が所属する集団などに対して，教師やカウンセラーをはじめとする周囲の援助者たちによる介入のあり方や方法についての研究が中心である。このような研究の多くは事例をもとにした研究であり，すでに数多くの研究成果が報告されている（野田・上地 ,1999；岡本 ,2001）。その一方で，いじめへの対応に関する実証的な研究は限られている。たとえば，香取（1999）による過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復法についての研究や，いじめ加害者のいじめの停止理由を明らかにする中で，そこからいじめ解決に向けた加害者への介入や対応についての議論を行った研究（本間 ,2003）などをあげることができる。

また，近年，いじめ被害者への対応を射程に入れた実証的な研究として，被害者自身の実際のいじめへの対処法，もしくは一般の生徒による対処法の推測を通して有効な対応を検討する研究が行われるようになってきている。たとえば，上地（1999）は，中学生が予測したいじめ対処法に対する教師と生徒の有効性の評価の比較を行い，その違いを明らかにしている。また佐藤・若島・長谷川（2000）は，実際にいじめ被害経験を持つ小・中・高・専門学校生を対象にしてその対処法を検討し，被害者が「何もしない」といじめが長期化し，「他に友人を作る」や「誰かに相談する」などの具体的行動を起こすと短期に解決していることを示している。さらに大野（2000）は，いじめに対する担任への通報の効果への期待の高さに，担任の年齢や罰の公言が正の影響を及ぼしていることを明らかにしている。これらの研究は，いじめ被害者または一般の生徒によるいじめ解決に向けた様々な対処の中から，いじめに対する有効な対処法を見つけることを目的としており，いじめ被害者への対応を考えるための実践的な方向性を持った研究と言えよう。

以上のようないじめに関する実証的な研究の中から，本研究の主たる目的は，いじめ被害者の実際のいじめへの対処と解決に焦点をあて，いじめ被害者への支援に寄与する対応について検討することである。本研究の目的を具体的に述べると次のようになる。第 1 に，自らに向けられたいじめに対して，いじめ被害者はどのような対処を行っているかを明らかにする。第 2 に，いじめを解決した被害者の解決理由を明らかにする。最後に，これらの結果から周囲の援助者によるいじめ被害者への支援を中心としたいじめへの対応についての考察を行う。

調査対象は自殺などいじめがもっとも深刻化しやすい中学生とする。また，直接的いじめ（direct bullying）が男子に多いという Olweus（1993）の指摘のように，いじめの手口や内容に関して性差があると言われており，いじめ被害者の対処に関しても性差が考えられる。そこで上述した分析は，性差を考慮しながら行うこととする。

方法

1. 調査対象

複数の公立中学校に在籍する中学生，計 1245 名（男子 643 名 , 女子 602 名。1 年生 387 名 ,2 年生 398 名 ,3 年生 460 名）を対象に調査を行い，その中からいじめ被害経験があると答えた生徒 150 名（男子

59 名 , 女子 91 名。1 年生 35 名 ,2 年生 57 名 ,3 年生 58 名）を本研究の直接の対象とした。

2. 調査内容

以下のような尺度を作成した。「いじめ被害経験の有無（1 項目）」を作成し，調査対象全員を対象にして，“ なし ” と “ あり ” の 2 件法で回答を求めた。次に，「いじめ被害経験の有無」で “ あり ” と答えた「いじめ被害者（150 名）」を対象として，「いじめ被害対処」に関する尺度を作成し回答を求めた。「いじめ被害対処」に関する尺度は次のように作成した。

中学生を対象にした質問（「いじめられたら，あなたはどのように対処しますか」）に対して，自由記述による回答を求めた（1997 年 9 月公立中学校 1 ～ 3 年生 107 名）。収集された自由記述の内容と，佐藤・若島・長谷川（2000）によるいじめの解決努力としてあげられた項目をもとに，複数の中学教師の意見を参考にして「いじめ被害対処」の 17 項目を作成した。そして，いじめ被害経験者に対して，実際の「いじめ被害対処（17 項目）」の有無を尋ねた。対処経験の有無を明確にするために，“ なし（0 点）” と “ あり（1 点）” の 2 件法での回答を求めた。

「いじめ解決」は，いじめ被害者のいじめ解決に関する認知の程度を知るために，“ ぜんぜん解決していない（1 点）” から “ 完全に解決した（4 点）” の 4 件法とした。また，いじめ被害が解決した生徒（“ かなり解決した（3 点）” と “ 完全に解決した（4 点）”）を対象に，解決した理由についての自由記述を求めた。

また，いじめ被害の内容に性差が認められる可能性があることから，「いじめ被害内容（7 項目）」を，森田・滝・秦・星野・若井（1999）によるいじめ全国調査の中の「いじめ被害の頻度，期間，手口」を用いて作成し，“ なし（1 点）” から “ よくあり（3 点）” の 3 件法で実施した。

いじめの定義に関しては，森田他（1999）によるいじめ全国調査で使われた以下のような内容を用いた。『このアンケート調査で「いじめる」とは，ほかの人に対して，＊いやな悪口を言ったり，からかったりする。＊無視したり仲間はずれにする。＊たたいたり，けったり，おどしたりする。＊その人がみんなからきらわれるようなうわさをしたり，紙などにひどいことを書いてわたしたり，その人の持ち物にひどいことを書いたりする。＊その他，これらに似たことをするなどのことです。いじの悪いやり方で，何度も繰り返しからかうのも，いじめです。しかし，からかわれた人もいっしょに心のそこから楽しむようなからかいは，いじめではありません。また，同じくらいの生徒どうしが，口げんかをしたり，とっくみあいのけんかをしたりするのは，いじめではありません。』

3. 調査手続き

2001 年 10 月，無記名の質問紙法による学級単位の一斉調査を行った。職員会で調査の内容と方法を説明し，その後各学級担任が実施した。

結果と考察

1.「いじめ被害対処」各項目の性差に基づく分析

「いじめ被害経験の有無」で “ あり ” と答えた生徒は 150 名（12.1%）であり，森田他（1999）の大規模ないじめ調査の被害経験者 13.9% とほぼ同一の結果であった。

このいじめ被害者 150 名を対象に，男女別に「いじめ被害対処」各項目における対処“ あり ”の度数を見た（FIGURE 1）。男子で“ あり ”の度数が高い対処は，「11. いじめる相手を無視する（51.0%）」「14. いじめる相手にやめてほしいといった（48.1%）」「2. いじめる相手に反撃した（44.2%）」の順であった。これらの対処は，いじめ加害者に向けた能動的な対処であった。続く男子の対処は「13. いじめのことを考えないようにした（40.8%）」「8. 誰にも言わずにがまんした（37.3%）」「3. いじめる相手と会わないようにした（36.0%）」「16. 何もしなかった（32.0%）」であり，上位 3 つの対処とはまったく異なる対処であった。すなわち，これらはいじめ加害者に対して回避的な言動を示す対処であった。以上のように，男子では大きく異なる対処が上位を占めていた。しかし，これらの対処は，いずれも友人や親など第三者への相談や新たな関係づくりなどの周囲のリソースを利用する間接的対処ではない点で，共通していると言えよう。

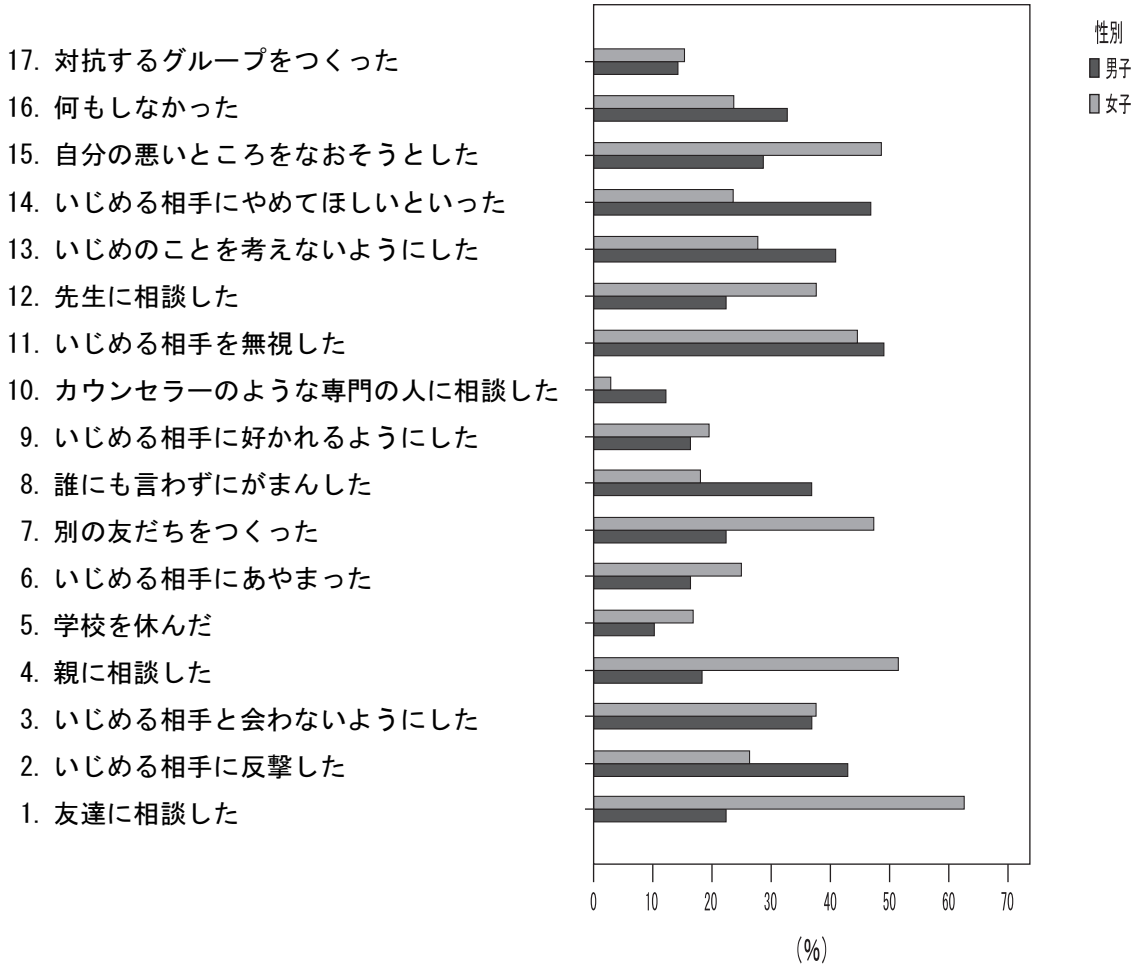


FIGURE 1　男女別「いじめ被害対処」

一方，女子では「1. 友達に相談した（62.1%）」がもっとも多く，唯一半数以上が選択した対処であった。次に「15. 自分の悪いところをなおそうとした（49.4%）」「4. 親に相談した（47.7%）」「7. 別の友だちをつくった（47.1%）」という順であった。項目 15 以外はすべて項目 1 と同様，いじめの当事者ではない第三者への相談や新たな関係づくりというサポート志向の間接的な対処であった。すなわち女子

では，直接的な対処をするよりも，間接的な対処を選択する傾向が強いと考えられる。

以上のことから，いじめ被害者の対処は男女でかなり異なっていると言えよう。この点をより明らかにするために，それぞれの項目で χ^2 検定を行った。その結果，男子が有意に大きい項目は，「2. いじめる相手に反撃した」（χ^2 (1) =6.42, p<.05），「8. 誰にも言わずにがまんした」（χ^2 (1) =6.34, p<.05），「14. いじめる相手にやめてほしいといった」（χ^2（1）=10.07, p<.01）であり，逆に女子が有意に大きい項目は「1. 友達に相談した」（χ^2（1）=19.14, p<.001），「4. 親に相談した」（χ^2（1）=12.46, p<.001），「7. 別の友だちをつくった」（χ^2（1）=8.51, p<.01），「15. 自分の悪いところをなおそうとした」（χ^2（1）=5.24, p<.05）であった。このことから，男子は女子に比べいじめ加害者に対して能動的または回避的に向き合うような直接的な対処を行う傾向にあること，また，女子の方が友人や親を中心とするサポート志向の間接的な対処を選択する傾向にあることが明らかとなった。

なお，「5. 学校を休んだ」の男女合わせた度数は 14.9%（男子 10.0%，女子 17.9%）で，対処の順位としては低かったものの，いじめ被害経験を持つ生徒の中で，学校を欠席する生徒が 15%程度いることは，不登校に陥った生徒の中に，ある程度の割合でいじめ問題が隠れていることを示している。不登校の予防の観点からも，いじめ被害者への支援は重要な課題と言えよう。

2.『いじめ被害内容』の因子分析と性差

「いじめ被害経験の有無」で“ あり ”と答えた生徒 150 名（男子 59 名，女子 91 名）を対象にして，「いじめ被害内容」で固有値 1 以上を基準に因子分析（主因子法，バリマックス回転）を実施した。因子の減衰状況と解釈可能性を考慮して因子数を決定した結果，2 因子を抽出することができた。第 1 因子は，“ お金やものをとられる ”“ ものを隠される・こわされる ”などから「身体・物理的いじめ被害」，第 2 因子は“ 悪いうわさを流される ”“ 無視・仲間はずれ ”などからなり「心理的いじめ被害」と命名した（TABLE 1）。なお，それぞれの因子の α 係数を算出したところ，「身体・物理的いじめ被害」は，.716，「心理的いじめ被害」は，.619 であり，各因子の内的一貫性はほぼ認められた。

また，尺度得点（各尺度の合計得点を項目数で除した得点）を使って性差を見たところ，予想通り性差が認められた（「身体・物理的いじめ被害」（t（130）=5.811, p<.001），男子 1.70> 女子 1.22;「心理的いじめ被害」（t（138）=-2.176, p<.05），男子 2.02< 女子 2.22）。「身体・物理的いじめ被害」で有意に男子が高く，「心理的いじめ被害」では逆に女子が高いという結果であった。この結果は，「いじめ被害対処」の性差を説明するうえでの重要な手がかりと考えられる。この点については，総合考察で検討したい。

TABLE1　いじめ被害者による「いじめ被害内容」の因子分析（バリマックス回転後）

	F1	F2	h^2
4. お金やものをとられる（α=.716）	.739	.149	.568
5. ものを隠される・こわされる	.721	.142	.540
3. たたかれる・けられる・おどされる	.600	−.095	.369
7. いやなことや使いはしりをさせられる	.486	.336	.349
6. 悪いうわさを流される（α=.619）	.204	.673	.495
2. 無視・仲間はずれ	−.087	.549	.309
1. 悪口・からかい	.096	.369	.145
2 乗和	1.921	1.254	
寄与率（%）	26.6	16.1	42.7

3.「いじめ解決理由」の自由記述

「いじめ解決」で,“かなり解決した（3 点）”または“完全に解決した（4 点）”と回答した生徒を対象に,「いじめ解決理由」の自由記述を求めた。自由記述欄にその理由を記入した生徒 66 名を対象に,筆者と心理学専攻の大学院生と中学校教師で記述内容を検討し,「いじめ解決理由」に関する分類を行った（TABLE 2)。

その結果,“クラスが替わって会わなくなったから”“いじめた子が先生に怒られて止めた”のように，自らの対処でなく「外部の影響」を解決理由として挙げた生徒が半数（35 名（53.0%））を超え,もっとも多かった。以下,“相手に反撃して止めさせた”“相手を無視した”“自分のいけないところをなおした”のように，加害者への能動的な対処のみならず，受動的な対処をも含めて「被害者の対処」に関する内容を記述した者 27 名（40.9%),「不明」4 名（6.1%）の順であった。半数以上の生徒が「外部の影響」として，いじめ解決の理由を記述していることから，自らの力よりも外部的な理由によって解決したと感じている生徒が多いことが明らかとなった。

加えて，もっとも多くの生徒が記述した「外部の影響」を，転校やクラス替えや時間の推移などによる「状況・物理的理由」（19 名）と，保護者や教師の援助，加害者の変化による「人為的理由」（16 名）に分類することができた。いじめを解決した生徒全体の 28.8%が解決の理由を「状況・物理的理由」に帰属していたことは，いじめを解決した生徒でも 3 割近くは効果的な対処を見つけられない状況に置かれていたことを示していると考えられる。

TABLE2　いじめ被害者の「いじめ解決理由」（自由記述）の分類と度数（N=66）

分類		内容	例
1.外部の影響 N=35(53.0%)	1.1状況･物理的理由 N=19	転校，クラス替え，時間の推移などの外的影響による解決	クラスが替わって会わなくなったから。自分が転校したから。時間がたって自然に解決。
	1.2人為的理由 N=16	教師・保護者・友人の援助，加害者自身の変化などの外的影響による解決	いじめた子が先生に怒られて止めた。友だちが仲介してくれたから。相手の方から謝ってくれた。
2.被害者の対処 N=27(40.9%)		加害者への働きかけ，第3者への相談など,自らの何らかの対処による解決	相手を無視した。相手に反撃して止めさせた。先生と親に相談して話し合いをした。自分のいけないところを直して，別の友だちに相談に乗ってもらった。
3. 不明 N=4(6.1%)			わからない。特にない。

総合考察

これまでの結果を整理すると以下のようになる。①本研究のいじめ被害者は 150 名（12.1%）であり,従来の調査結果とほぼ同様の割合であった。②いじめ被害者による対処に性差が認められた。すなわち，男子はいじめ加害者に対して能動的または回避的な傾向の強い，より直接的な対処を行っていること，また女子の方が友人や親や教師など第三者のサポートを求める対処を中心にした間接的な対処を選択する傾向にあることが明らかとなった。③いじめ被害者の約 15% が「学校を休む」という対処を行っており，不登校との関連が推測された。④「いじめ被害内容」にも性差が認められた。すなわち,「身体・物理的いじめ被害」で有意に男子が高く,「心理的いじめ被害」では逆に女子が高いとい

う結果であった。このことは，「いじめ被害対処」の性差を説明するためのひとつの要因として考えられる。⑤いじめが解決したいじめ被害者の自由記述から，半数を超える被害者が解決理由を自らの対処ではなく，「外部の影響」として記述していた。さらに「外部の影響」と記述した者の半数以上（いじめを解決した生徒全体の 28.8%）が，転校やクラス替えなどの「状況・物理的理由」に，いじめ解決の理由を帰属していた。このことから，いじめを解決した生徒でも，3 割近くは効果的な対処を見つけられない状況に置かれていることを示していたと言えよう。

これらの結果をもとに，いじめ被害者への支援と関連づけながら，以下に 2 つの点について考察を行いたい。まず第 1 に，いじめ被害者の対処に性差が認められた理由についてである。男子に直接的な対処が多く，女子に間接的な対処が多かったことは，「いじめ被害内容」で見られた有意な性差，すなわち「身体・物理的いじめ被害」が男子に多く，「心理的いじめ被害」が女子に多いことと関連していると思われる。

女子の場合，無視やうわさなどの「心理的いじめ被害」が高いことから，直接加害者に立ち向かうよりも，友人や保護者や教師という周囲のリソースを活用する間接的な対処によって，無視やうわさなどの修正や変更を図るため試みを頻繁に行っていると考えることができる。心理的ないじめに対処するためには，第三者を積極的に活用するような，より心理的に複雑な動きが必要なのかもしれない。このように考えると，「心理的いじめ被害」が相対的に低い男子の場合，友人や保護者や教師という周囲に存在するリソースをあまり活用しない比較的直線的な対処が中心となっているのは当然と言えよう。したがって，男子の場合はおそらく，身体・物理的いじめのような加害者の脅威が大きいときには忍耐や沈黙のような回避的な対処を選択し，そうでない場合には逆に加害者に立ち向かっていくことが多いと考えられる。

なお，対処の性差が認められた理由は，上述したいじめ内容への認知から生み出されるのみならず，中学生のもつ一般的なサポートに関する性差とも関連している可能性がある。すなわち，男子に比べ女子の方が身近な人によるサポートへの強い期待を持っていること（岡安・嶋田・坂野 ,1993）も，いじめへの間接的な対処が女子に多く見られる理由なのであろう。

いずれにしても，いじめ被害者への支援は，性による対処の特徴を十分に考慮に入れながら進めていく必要がある。とりわけ，男子に多く見られる忍耐や沈黙のような回避的な対処が行われた場合，そのことは周囲の援助者によるいじめ発見をきわめて難しくする結果に結びつきやすい。また，このような対処をするいじめ被害者は，いじめ発見者から指摘を受けても，被害を否定したり否認したりする可能性も高い（森田・清永 1994）。したがって，周囲の援助者は，いじめの発見に日頃から心がけるとともに，特にいじめを否定したり否認したりする者に対しては，被害者が安心して話せるような関係を粘り強く作り上げていくことに留意すべきであろう。

第 2 の考察は，いじめ解決者の解決理由の記述に関してである。いじめ解決者全体の中で，「外部の影響」を解決理由にあげた者が半数を超えており，さらにクラス替えや転校のような状況・物理的理由と答えた者が「外部の影響」の内の半数を超えていた。すなわち，いじめを解決した被害者の半数以上が解決の理由を自らの能力や努力に帰属しておらず，さらに 3 割近くの解決者が第三者による対人援助の結果とも感じていないことを示している。このことからいじめは，被害者自身の能力や努力のみでは解決がきわめて困難であるのみならず，被害者の力で統制できない状況・物理的な要因に解決を依存せざるを得ないという無力感を多くの被害者に感じさせる問題なのである。

このことは，中学生が予測したいじめ対処法に対する教師と生徒の有効性の比較を行い，「危機介入

依頼志向」に関して教師が生徒より，「無抵抗・服従志向」に関して生徒が教師よりも有効と考えていることを明らかにした上地（1999）の研究結果と関連していると思われる。すなわち，中学生段階のいじめ被害者は「無抵抗・服従志向」のような回避的・受動的な対処を強いられやすい，また逆に言えば，そのような対処を通して，結果的に状況・物理的ないじめ解決のみを期待する立場に追い込まれやすいのであろう。言い換えるならば，自らの力や周囲の力を借りることで逆に問題がこじれてしまうよりも，時間が経てば，いずれクラス替えなどで自然に解決するのではとの期待が中学生の中にはあるのかもしれない。いずれにしても，このような結果は，周囲の援助者による被害者への対応を困難にしている大きな理由と考えられる。いじめは解決可能な問題であり，そのために周囲の援助者が全力を尽くすことを常に子どもたちに呼びかけていく学校をあげての啓発的な活動は，いじめ被害者の支援にとってきわめて重要な意味を持つのである。

引用文献

本間友巳　2003　中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応　教育心理学研究 ,51,390-400.

香取早苗　1999　過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復法に関する研究　カウンセリング研究 ,32,1-13.

森田洋司・清永賢二 1994　新訂版 いじめ : 教室の病い　金子書房

森田洋司・滝充・秦政春・星野周弘・若井彌一　1999 日本のいじめ　予防・対応に生かすデータ集　金子書房

野田暢子・上地安昭　1999　いじめ・不登校生徒の母親の時間制限カウンセリング－怒りを静めた母親が再生に向かった事例－　カウンセリング研究 ,32,311-319.

尾木直樹　1997　いじめ防止実践プログラム　学陽書房

岡本淳子　2001　いじめ問題の解決に向けて　中村伸一・生島浩編　暴力と思春期　岩崎学術出版

岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993　中学生のおけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果　教育心理学研究 ,41,302-312.

Olweus,D. 1993 *Bullying at school: What we know and what we can do*. Cambridge, MA: Blackwell（松井賚夫・角山剛・都築幸恵訳 1995 いじめ こうすれば防げる 川島書店）

大野俊和　2000　いじめの対策にまつわる問題の探索的研究-通報の効果への期待を支えているものは何か -　日本心理学会第 64 回大会ワークショップ「いじめと学校問題 - その現状と解決について -」

佐藤宏平・若島孔文・長谷川啓三　2000　小・中・高専門学校生を対象としたいじめの調査 - いじめの期間と本人の解決努力・解決様式との関連の検討 -　日本カウンセリング学会第 33 回大会発表論文集 ,274-275.

Suckling, A., & Temple, C. 2002 *Bullying: A whole-school approach*. London, UK : Jessica Kingsley Publishers.

Thompson, D., Arora, T., & Sharp, S. 2002 *Bullying: Effective strategies for long-term improvement*. London, UK : Routledge Falmer.

上地広昭　1999　中学生のいじめの対処法に関する研究　カウンセリング研究 ,32,24-31.